世界戲曲全集

XIII

獨逸古典劇集

獨墺篇（3）

昭和四年十月七日　印刷
昭和四年十月十日　發行

〔非賣品〕

世界戲曲全集

（第十三卷）

獨逸古典劇集

發行者　東京市神田區錦町三丁目九番地　小川菊松

印刷者　東京市牛込區若松町五十四番地　大杉直次郎

印刷所　東京市牛込區若松町五十四番地　大杉印刷所

發行所　東京市神田區錦町三丁目九番地　世界戲曲全集刊行會
電話神田（25）四〇〇三番
振替東京五一五八九番

責任製本近代社製本部

第十三卷　獨逸古典劇集　目次

代々山番……（五幕）……ルードヰヒ作……中島清譯……一
公子フリードリヒ・フォン・ホンブルク……（五幕）……クライスト作……中島清譯……一〇一
ウォツェック……（斷篇）……ビュヒナー作……黑田禮二譯……一八一
ダントンの死……（三幕）……ビュヒナー作……黑田禮二譯……二一一
ユーディット……（五幕）……ヘッベル作……吹田順助譯……二八五
マリア・マグダレーネ……（三幕）……ヘッベル作……吹田順助譯……三六一
ギイゲスと彼の指輪……（五幕）……ヘッベル作……吹田順助譯……四二一
作者小傳及び解題……四八九

口繪目次

クライスト（上圖）
ヘッベル（下圖）
「公子ホンブルク」デユツセルドルフ劇場所演（上圖）
「ウオイツエツク」チエツコのホフマン裝置（下圖）
「ユウディツト」ケルン劇場所演（上圖）
「マリア・マグダレエネ」（下圖）
「ダントンの死」（ラインハルト演出）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

OTTO LUDWIG

DER ERBFÖRSTER

代々山番

（五幕）

オットー・ルードヰヒ作

中島清譯

人物

シュタイン　富裕な或る製造所長、又地主
ローベルト　その息子
クリスチャン・ウールリヒ　デュステルヴルドの山番
　代々山番と呼ばはれてゐる
ソフィー　その妻
アンドレス　ウールリヒの助手
マリー
キルヘルム　右二人の子
キルケンス　豪農、ソフィーの叔父
牧師　ワルデンローデ(村の名)の牧師と云はれてゐる
メルレル　シュタイン家の番頭
獵士ゴットフリード　「書物獵士」と呼ばれる
ワイレル　ウールリヒの家の材木番
國境の居酒屋の亭主
フライ
リンデンシュミード　野獸盜人
カトリネ
バスチアン　シュタイン家の僕

吊臺舁き二人

デュステルヴルドの山番の家と、ワルデンローデのシュタインの邸とで、交々に演ぜられる。なほ三幕目には國境の居酒屋と忍びが谷とで、一度づつ演ぜられる。

第一幕

デュステルヴルドの山番の家。

室の後方に開き戸一つ、棚一つ、その兩側に普通の戸口。右手に窓。左手、後方に煖爐、ずつと前方にシュヴルツヴルド〔獨逸西南の有名な山地、時計を產す〕製の時計、それから横木があり、それに種々澤山の銃が懸けてあり、中には双身銃もある。獵袋、その他の獵具もある。書物臺には聖書や唱歌の本が載つてゐる。

第一場

舞臺では樂人連の或る彈奏が聞えてゐる。ワイレル、中央の戸口より、邊りを見廻しながら緩くりはひつて來る。同時にソフィーは左手より忙しげに登場。それからアンドレス、キルヘルム、最後にマリー。

山番の妻ソフィー　もう樂人さん達は來てたわね。私、窖の鍵は何處に置いたか知ら？　樂人さん達に飲み物を出さなきやならないのにね――おや、ワイレルさんなの？

ワイレル　そのワイレルでさ、時に爺さんは何處へ行つたかね？

ソフィー　あの山番どんさ？　内の人のことなの？　外にはゐなさらない？

ワイレル　木挽どもの事で話があるんだがな。

ソフィー　待つてたらいいぢやないの。

ワイレル　待つてたらだと？　飛んでもねえや。仕事に追はれてゐまさあね。

ソフィー　ぢやあ、行つて捜せはいいのに。

ワイレル　（粘土製の煙管に、ゆつくりゆつくり煙草を詰めながら）さうでさあ。

ソフィー　うちの人、多分あのシュタインさんと一緒よ――

ワイレル　さうでさあ。もう砂は火曜日に撒いたし、花飾りも戸口ん所へやつといた。何しろ――今日はローベルト君と、家のマリー嬢ちやんの許嫁の日なんだからな。これで「舅御シュタインさん」と云ふ樣な段になりあ、愈〻以て兩家は親密になるわけだな。いやいや、それ所ぢやねえて。そのシュタインが今ぢやあ此地所は買つて

るし、ウールリヒ先生は、其處の山番樣と來てら。町の肥太つたあの辯護士が、昨日ちやんと手續きは濟ましたつけ。これでミュタイン公、もう今日起きると直ぐからデュステルヴルドの御主人樣だて。

ソフィー　その卓を此方へ――

ワイレル　（ソフィーと二人で卓を左手へ運びながら）古染馴のシュタイン老が主人になつて、おまけに旦御さんとなるんだから、ウールリヒ公も隨分得をすると云ふもんだて。

ソフィー　ずつと煖爐の方へさ。今一臺そこへはひるんですよ。

ワイレル　（獨りくすくす笑ひ）全く以て鑄掛屋だて、（直ぐ云爭ひを始め又直ぐ仲直りする者のことを獨逸では鑄掛屋と云ふ）あのシュタインもウールリヒもさ。毎日毎日一度づつは喧嘩だからな。

ソフィー　喧嘩は當り前さ。その代りに冗談よ。（忙しさうに戸口より出る、又はひつて來る）

ワイレル　（ソフィーの後について、或る身振りをしながら戸口の所まで行く）冗談だつて？　へん、そこに曰くがありまさあね。一方は氣短かでせう、そして今一方は頑固と來てますからな。今度の賣買一件このかた、森の立樹を間引く、間引かぬ、てえのが日毎の喧嘩の種でね。重角金滿家つて奴あ、何でもねえ事に獨り合點を極め込んで、云ひ張らうと計りするもんでさ。そこであのシュタインだが、一列おきに樹を伐り倒せあ、日の光が好う屆いて、あとの樹木の生長が早え、と斯ういふ考さ。と云ふなああの書物獵士の奴めが、何か古ぼけた書物からでも引つ張り出して勸めたんでもげせうよなあ。所がウールリヒにやあ然うは行かねえさ。一昨日だつたつけ、二人はそれを云ひ合ひましてな、シュタインは伐らなくちやいかんと云ふ。ウールリヒは伐つちやいかんと云ふ、シュタインは、いや伐らなくちやいかん。ウールリヒはいや伐つちやいかん。いや是非是非伐らせるんだ。いや是非是非伐らせちやいけねえんだ、といふ張合ひ方さ。シュタインは立上がつて外套おつ取り、卸つめるのもまだるつこさうに、椅子を二つばかりひつくり返して行つちひましたて。それで儂あ、今度といふ今度こそ、親密も何もおさらばだと思えやしたさ。所が一杯喰はされやしたな。それあ一昨日の晩の事たに、昨日はもう朝も早く、まだ碌に明けもしねえ時分によ、あの郎から煙草をふかしながらやつて來てな。此家の戸をこつこつ叩いてるぢやあありませんか、喧嘩なんぞした素振りも見せね

えでよ、それあシュタインがさ。それから又此方はと云ふと、もはや物の十四五分も待つてゐたんで、「さ、おはひり」と、あの白い鬚の下から呻り出しまさ、ウールリヒがな。そして又森へと一緒に出かけるんだが、そのあつさしりた樣子つたら、まるで爭なんぞした覺えも無えつて恰好さ。こりあもう誰にも珍らしい事ちやねえて。夜は喧嘩、朝は又早く連れ立つて山林へ行く。さうしなきやなんねえ事でもある樣にな。それから子供達にやあのシュタインさうでねえかてえと、なかなかどうして。伴ローベルトとの仲あどうだ！　あの伴が家出しようとした度數だつて、半ダースぐれえはあるからな。だがその揚句、また故の通りに納まると來てら。變挺な親子さ。

（さう云ひながら彼は、アンドレスとキルヘルムが運んで足して行く卓の前を、じりじりと後へ退る。はじめの卓は脚光の方から奥へ向けて据ゑられてゐる）

ソフィー　此方へ。さう。それから今度は椅子を運ばなくちや。ワイレルさんも手傳ふだらうからね。

アンドレス、キルヘルム　（退場）

ワイレル　（出て行きさうな樣子をして、急に忙しさうに）ワイレルも仕事に追はれてゐねえだと、手傳ひもしやせうがな。樵夫どもにも用があるし、樅の種子の事もあるし、それに鹽の話もしとかにやなんねえて。さうださうだ。どうも仕事だらけで、物を考える暇もありあしねえ。それに、あの爺さんはと云ふと——（ウールリヒが小言でも云ふ時の六ケしさうな顏つきをまねる）

ソフィー　さう？　ぢやあお前さんが仕事を遲らしたつて、私あ知らないからね。（又出て行く）

ワイレル　（又ゆつくりと構へ込み）　さうでさ。（鼻に指を當て）だが待て、此度も又シュタインの方が折れて出るか知らん？　もうシュタインはウールリヒの主人て譯だがな！　だが、前以て分りやしねえや。とは云へ然しだ——いつだつて主人に權利はある筈だがな？　なぜつてそれあ主人だからよ。ふん、時に少々眞劍にやつて呉んねえかな。又おきまりの仲の好ささうな顏つきのしつ競にやあ、もう飽きちやつた。

ソフィー　（二人の子供と一緒に椅子を運んで來ながら）七つ、八つ、九つ、十。（尙ほ一度小聲で算へ直してみる）さうね、いいわ。

ワイレル　ねえアンドレス君、昨日はあの書物獵士の奴め、好え御面相をしやがつたぢやねえか。なあ、又君彼奴と何かがおつ始めたんだものなあ。

ソフィー　あの執念深い亂暴な人と？　（膝立てをする）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

アンドレス　あんな奴と疎常におとなしく誰がつき合へるもんですか。

ソフィー　それでさ、もう仕てしまつた事は仕方ないけれど、あんな人には今後ようく氣をつけて用心してないといけませんよ。

ワイレル　もういいさ。だつて彼奴みてえに、手の先きから足のさきまで、あのくれえ取り所の無え人間も又とねえからな。

アンドレス　あんな奴、僕あ怖くはありやしない。

ソフィー　あのね、キルヘルム、お前お庭に行つてね、貝母だの金魚草だのヒエン草だのを少し採つておいで。ガラスに生けて見榮えのする樣に、幾らか大きいのをだよ——もうシュタインさん達もお見えになる頃だわね、番頭のメルレルさんも從いて來るんだらうね。

ワイレル　あの獨身先生もかな。

ソフィー　それからね、アンドレス、キルケンスの叔父さんはまだお見えにならないか何うか、一寸見ておいで。

アンドレス、キルヘルム　（退場）

ワイレル　キルケンスも來ますかい？

ソフィー　（調子を高め）キルケンス旦那の事をお云ひなの？　姪の娘が許嫁の式をするといふのに、お見えにならないつて事がありますものか。

ワイレル　ふん、御尤もぢや。お金があるからな、あのキルケンス旦那にはな。此界隈で第一の大百姓樣さ。儂も昔あワイレル旦那だつたがな。金貨どもが儂の珈琲店をたうとう閉めちまつたつけ。あの時奴さん達、この儂にくつ附いてゐた「旦那」つてものを、あの戸の内へ閉め込んぢまつたんでさ。今でもあの内にや、ちやんと挾まつてゐまさあね。今ちやあ手短に、このワイレルと成り下がつたんで、やれ「ワイレルが手傳ふんだらう」だの、「ワイレルが其處にゐるから」だの、なんだのかだのと云はれる譯でさ。これで稀にあ小癪に觸る事も無えではねえが、まあ愚痴さね。愚痴をこぼして自分だけ慰んでゐるんだから、つまり小癪も慰みでがさ。おや、花嫁御寮がお見えだぞ。

マリー　（登場。以下の會話の間、母ソフィーと二人で膳立てをする）

ワイレル　ほい、まるで栗鼠みてえに敏捷いなあ。

ソフィー　ワイレルさんが、お前にお世辭を云つてるよ。此人はこんな變挺な物云ひをする人ですからね。

ワイレル　さうでさ。構ふもんかね。ぞんざいだらうと、上品だらうと、女つ子てえものあ、お世辭を云はれてる

とせえ思つてれあ、悦んでるものなんだからね。餓鬼どもが猫っ子でも撫で廻す樣な、圍梅で、手荒にやつても、軟かにやつても、喉をごろごろ鳴らし出す分にやあ差支へ無えのさ。

マリー　まあ結構な譬へだわね、それでも矢つばしお世辭か知ら。

ワイレル　それ見な、さう云ふのが喉をごろごろ鳴らすといふもんで、撫で廻されてゐる譯さ。

マリー　（窓より眺め）お母さん、見えてよ。

ソフィー　ローベルトさん？

ワイレル　どうれ、ぢやあ乃公は木挽どもの所へ行くかな。でないと、又あの爺さんがぷりぷりするでな。（退場）

ソフィー　（呼びかける）ぢやあお前さん席に著かれなきや、お前さんのお膳部は私しまつとくわ、ねえ——仕樣のない人だね。もう上品な人にや成れやしないわ。これと云ふのも、昔は豐かな暮らしをしてゐたからよ。又それだから、お前のお父さんもあの人を大目に見てゐなさるのさ。古くからの仲間同士ではあつたしね。あの書物獵士も同じ仲間よ。だけれど、財産はみんな飲潰してましつたから、シュタインさんの所へ厄介になつて來たのよ。（食卓の上を見渡し）この上席が舅さんと、此方に並んでお父さん。それからあの溫良しい牧師さん。でもまあ、ほんとに、あの牧師さんがお居でにならなかつたら、ローベルトさんは疾つくに家出してしまつたかも知れないわね。

マリー　あの時は、お母さん、本當にローベルトさんはひどかつたのね、隨分亂暴だつたわ。

ソフィー　さうよ。あの時は牧師さんと私達で、やつとの事に止めたんだものね。（今一度著席の人の名を云つてみる）それから此處がメルレルさん、彼處がお前の名付親のキルケンスさん、それから此處が私、そこがお前とローベルトさんよ。あの席がアンドレス、それからキルヘルム。本當にまあ、月日の經つのは早いものね、私の許嫁の日の事も思ひ出されるわ。でも私は、今日のお前みたいに仕合せぢやあなかつたのよ。

マリー　お母さん、お嫁にならうとする娘は、誰もみんな私みたいな氣持のするものなんでせうか？

ソフィー　お前くらゐに嬉しい譯のある者は無いでせうね。

マリー　だつて私のこの氣持が、嬉しいと云ふものなんでせうか。何だか私、重い樣な氣持なの、何だか斯う——

ソフィー　あたり前よ、露の置いた花草みたいなものなの。頭は垂れますともさ。でも、ちよつとも厄介な荷なんかぢやあないわ。

マリー　何だか私、お父さんを棄てて行くのが、悪い事の樣な氣がしますわ――ローベルトさんのためではあるけれど。

ソフィー　聖書にもあるぢやないの、女といふものは兩親を棄てて、良人に從ふべきものだつて――私の時はね、お前とは又違つた氣持だつたよ。お前のお父さんは其時分はもう立派な一人前の男でね、ずつと若い方ぢやあなかつたんだけれど、身長は高いし、容子は好いし、それにお髭もまだ眞黑でね、そりや隨分女達が垣間見たりしてゐたものよ、私ようく知つてるわ、あんな人を良人に持つたら好いだらうつて、さう思つてね。でもね、私にはお父さん隨分嚴格で、几帳めんでさ、何事にも細かに行屆いていらつしつたのよ。そして、娯樂なんて事は何一つなさらないんだから、お氣に入られる事なんぞ容易に出來なかつたわ。でも生活上の心配つてものは私ちつともしらなかつたの。それに又、お父さんが私を無理非道に取扱つたなんて云はうものなら、そりや嘘よ。きつい事はそりやきついお方なんだけれど。

マリー　それでお母さんは、いろんなお望みはなさらなかつたの？　何にも？

ソフィー　それあお前、娘の願ひを神樣が一々叶へて下すつた日にや、仕樣があるまいぢやないかね。娘心つてものは、何だか自分でさへ知らない事を望むものなんだもの。それはさうと、そら、ローベルトさんが見えたわ。嬉しい樣子をしてゐようよ、何とか思はせてはいけないからね。

第二場

前場の人々、ローベルト。

ローベルト　お早うございます、お母さん。マリーさん、お早う。

ソフィー　お早う、近き未來の花聟の君。

ローベルト　そんなにお母さんの御機嫌の好いのを見ると、僕どんなに嬉しいでせう。でもマリーさん、あなたは悲しさうな樣子をしてるぢやありませんか。僕はこんなに嬉しいんですよ。嬉し過ぎる位ですよ。朝ぢゆう僕は森にゐましたよ。露が露で眩しい位きらきら光つてる中へ、僕が押し分けてはひて行くとね、濡れた枝が、か

つかと熱る頬片を彈くんでせう。それで僕、どつかと草の中に坐つたんです、それでも嬉しさにぢつとしてゐられなくて、ただもう泣きでもしなけりや、外に仕方はないくらゐ嬉しかつたんですよ——それだのにさ、あなたは、いつもはあんなに生々して、鹿の樣に元氣なくせに、今日は悲しい？　え？

ソフィー　この子も悅んでゐますとも。だけれど、あなた此子の幼い時分の事からようく知つてるぢやありませんか——はたの人達が陽氣になると、いつもぢつと靜かにしてるのが此子の性分なんですもの。

マリー　いいえ、ね、ローベルトさん、私悲しかありませんの。ただね、何だかかうしんと嚴かな氣持ですの、もう朝からずつとかうなのよ、歩いても、立止つてゐても、まるでお寺にでもゐる樣な氣持がしますの、そしてね——

ローベルト　そして？

マリー　そしてね、この生涯が今直ぐ私の足もとから落込んで、ずつと遠く遠く沈んで行つてしまふやうな、そして新しい、そりや全く新しい生涯が始まるやうな、そんな氣持がしますのよ——悪く思つてはいけませんわねローベルトさん——それがかう妙に氣がかりで——

ローベルト　新しい生涯ですつて？　全く新しい生涯？　なあに、矢つぱし古い生涯ですよ、ただそれが美しくなるんですよ。矢つぱし古くからの美事な樹の下に坐つてゐるので、ただ其樹に花が咲くんですよ。

マリー　それから、私は父を棄てなきやならないんでせう、それに母もね。今までの物事はみんな過ぎ去つて行くのが見えるのに、今後の新しい事は分らないんですもの。古いのは棄てなきやならなくなつても、新しい所へはまだ達きませんもの。

ローベルト　お父さんを棄てる？　我々は皆一緒に、今まで通りでゐるんぢやありませんか。その爲め僕の親父がこのデュステルヴルドを買つたんぢやありませんか。

ソフィー　この春は一體にかう、何故つて事なしに妙な心配なんですの。次第々々に何事も好くなつて行くばかりだのに、それだのに斯うなのよ。一體仕合せつてものは、却つて氣がかりなものなのね。だから私の色々な願ひ事も、みんなに叶ふに極つてゐますわ——だつて外に考へやうはありませんものね。あんまり仕合せが大き過ぎるんだから、燒肉でも焦がし過ぎるとか、上等な皿でも一枚壞すとか、その位の事なら願つてしてもいいわね。幸福つて、太陽みたいなものなんだから、娛むには少し

は蔭がなくなつちやあね。あ、本當にその蔭が臺所に出來てゐやしないか知ら、私見て來ませう。（左手より退場）

マリー　（ローベルトと對ひ合つて立つた儘、暫く默つてゐた後）どうかなすつて！　ローベルトさん。

ローベルト　僕？　いえ。でも——

マリー　まだあなたお父さんに對して怒つてゐらつして？　ほんとにお父さんは好いお方ですわ。

ローバルト　そんなに僕のあの親父がいい人ですか？　僕は親父に可愛がられるのは、ひどく叱りつけられるより堪りませんね。親父の叱るのは、ただがみがみ云ふばかりだけれど、親父の慈愛と來ては、一も二もなく人を服從さして了ふんですからね。親父が怒れば、僕も屹として對抗してやるからいいんですよ。けれども可愛がつてかかられると、どうも此方ぢや手の出しやうがありませんしね。

マリー　それにあなたは、家出しようとなすつたのね、本當に惡いローベルトさん、私達みんなも棄ててさ。

ローベルト　しようとはしましたさ。しかし矢つぱしまだ斯うしてゐるぢやありませんか。ああ、あの時は全く困りましたね。何事にも迷つたんですよ、あなたの事もあるし、自分の事も考へなくちやならないしね。だがもうすつかり過ぎ去つちまひましたよ。少しは蔭がなくちやいけないだらうが、有り過ぎても困りますね。彼方へ行きませう、マリーさん、家の内は蒸し蒸しするから。樂人達に何か一つ面白いのを彈いて聞かして貰はうぢやありませんか、何かあの人達のやれるのをさ。（二人出て行かうとする）

第三場

山番、續いてソフィー、前場の二人。

マリー　（父を見るや否や、ローベルトを離れて父に取り縋る）

山番　まあ止せ止せ、どうもこの娘つ子は！（拂ひのけるやうにしながら）雨上がりに日の面が見えたんで、虻がうるさく飛んで來るかな。（娘が縋りつくのを譬へて云ふのである）又ローベルト君に何かめそめそ泣言でも並べ立てたんだらう、この女つ子どもは！　仕樣のない奴等だ。（マリーを押しのけ）　儂あローベルト君に少々話がある、君を捜してゐたのです、ローベルト・シュタイン殿。

ローベルト　ローベルト・シュタイン殿ですつて？　なぜもう名前だけで呼んで下さらないんです、そして呼びすてにして下さらないんです？

山番　呼びすてにするにも、しないにも、それぞれ時がある。この女つ子どもが去せちまつてから——

ソフィー　去せますともさ、この狼爺さん。勝手に何なりと話すがいい。

山番　さうだ。手前達が出て行つてからだ。

ローベルト　（母と娘とを戸口まで連れて行き）怒つてはいけませんよ、ねお母さん。

ソフィー　怒るまいと思つても、怒らないでゐられるものですか、ほんとに。

山番　戸口は閉めたッ！　分つたか。

ソフィー　分つてる、分つてる。

山番　ほんとに、誰が主人だと思つてゐやがる。くそつ！

第四場

山番、ローベルト。

山番　（二人きりになると、極り悪さうな様子で、室内を少し行つたり來たりする）

ローベルト　で、お話は——？

山番　無論云ふさ——（汗を拭く）ふん、ま、お掛けなされ、ローベルト・シュタイン殿。

ローベルト　まあ隨分御準備が——

山番　（膳立てしてある食卓の前面の端の椅子を指示す）

ローベルト　（腰かける）

山番　（書物臺より聖書を取り、ローベルトに對ひ合つて腰かける。眼鏡をかけ、頁を開き、咳拂ひをして）ソロモンの箴言、第三十一章、第十節「貞操ある婦人を授けられたる者は幸福なり、そは高貴なる眞珠よりも尊ければなり。その良人の心はその妻を信ずるを得て、食に乏しき事なかるべし。妻は良人に愛を奉げ、生涯、決して惱みとなる事を爲さず」。（短い間。それから腰かけた儘で、窓から、外へ怒鳴る）こらキルヘルム、其處で何をしてる——それから次に第三十節——ほんとに、黄楊苗すつかり蹂みにじつてしまふぞ、くそつ！「愛らしき事、美しき事は云ふに足らず、上帝を畏敬する婦人こそ讃ふべけれ」。——おいローベルト——

ローベルト　（呆氣に取られ）ウールリヒのお父さん——

山番　なほ又シラハの第何章、第何節——ローベルト・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.